



# トルストイ ★★ ★★

幼年時代 コサック ざんげ 人  
はなにで生きるか 愛あるところ  
に神もいる イヴァン・イリイー  
チの死 クロイツェル・ソナタ  
主人と下男 神父セルギイ

北垣信行・木村彰一訳

## 世界文學大系

世界文学大系 84

---

トルストイ ★★  
★★

---

昭和39年6月10日発行



編者 木村 彰 一  
発行者 古 田 晁  
発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京 4123 電話(291)局 7651

---

目次

幼年時代

コサック

ざんげ

人はなにで生きるか

愛あるところに神もいる

イヴァン・イリイチの死

クロイツェル・ソナタ

主人と下男

神父セルギイ

トルストイを讃えて

解説

|       |     |
|-------|-----|
| 北垣信行訳 | 5   |
| 北垣信行訳 | 72  |
| 木村彰一訳 | 183 |
| 北垣信行訳 | 229 |
| 北垣信行訳 | 244 |
| 木村彰一訳 | 253 |
| 木村彰一訳 | 292 |
| 北垣信行訳 | 349 |
| 木村彰一訳 | 382 |
| 木村彰一  | 428 |
| 北垣信行訳 | 413 |
| 木村彰一  | 428 |

裝  
幀  
庫  
田  
發

ト  
ル  
ス  
ト  
イ  
★★  
★★



## 幼年時代

### 第一章 カルル・イワーヌイチ

先生

一八……年八月十二日、——ぼくの十歳の誕生日だといふのでかすかずのみごとなブレゼントをもらった日からちようど三日目のことである。ぼくは朝の七時に、カルル・イワーヌイチに頭の真上で蠅とり（棒に砂糖袋の紙をつけてこしらえた）で蠅をたたかれたために、目をさましてしまった。そのたつき方がまた無器用きわまるもので、ベッドの檜の背板にかけておいたぼくの守護天使の像にひっかけてたうえに、たかたか死んだ蠅がぼくの頭にまっすぐおちてきたのだ。ぼくは毛布の下から鼻先をつきだすと、片手で、ゆれつづけている像をとめ、死んだ蠅を床の上になげおとして、寝ぼけ眼とはいへ怒ったような目つきでカルル・イワーヌイチをにらみつけてやった。ところが、彼は、はでな色あいの綿入れの部屋着に共ぎれでこしらえた帯をしめ、房つきの、毛糸で編んだあかい丸帽にやわらかいキッドの長靴といったかっこう

で、相変わず壁のあたりをうろつきながら、ねらいをさだめては蠅をたたいているのである。『いくらこのぼくがちいさな子供だからって、ぼくの眠りのじやまをすることはないだろう？』とぼくは思った。『どうしてヴォロージヤのベッドのほうにいる蠅をたたかないんだ？ あつちにはあんなにうようよいるのに！』ヴォロージヤはぼくより年上だし、ぼくはいちばんちびだといふので、それでぼくをいじめるんだな。そして、年がら年じゅう、どうしたらぼくをいやな目にあわせられるかと、そんなことばっかり考えているんだ』と、こぼくは小声でぶつぶつ言った。『ぼくの目をさましてびくびくさせたことはちゃんと承知していながら、気がつかないようなふりをしていやがる……いやなやつだ！ 部屋着にたつて、帽子にしたつて、あの房にしたつて、いやらしいたらありやしない！』

ぼくがこうして心のなかでカルル・イワーヌイチに対するむかむかした気持を吐露しているあいだに、彼は自分のベッドのそばへいき、その上にかかっていた、ビーズの、ちいさい靴の形をした袋から時計をとりだして見て、蠅たつきを釘にかけ、見るからに上ぎげんな顔をしてぼくたちのほうをふりかえつた。

《Auf, Kinder, auf! …sist Zeit. Die Mutter ist schon im Saal. (起きなさい、お母さんがた、起きなさい、時間ですよ、お母さんがた、お部屋にいらして)》と、彼は人のよさそうなの、いかにドイッ人らしい声で呼びかけてから、ぼく

くのそばへ歩いてき、ぼくの足のちかくに腰をかけて、ポケットから嗅ぎたばこ入れをとりだした。こちらは狸寝入りをきめこんだ。カルル・イワーヌイチはまず嗅ぎたばこをかぎ、鼻をぬぐい、指を鳴らして、それからやつとぼくを起こしにかかった。彼はくすくす笑いながら、ぼくのかかとをくすぐりだして、《Nu, nun, Faulenzer (なまけ者!)》などと言っていた。

ぼくはたとえどんなにくすぐられるのが気持がわるかろうと、寢床からはねおきもしなければ返事もせずに、ただ頭をますますふかく枕の下へかくして、あらんかぎりの力で足をばたつかせながら、一所懸命笑いかみころしていた。『ほんとにいい人だ、それにぼくらをとてもかわいがってくれているし。それなのに、ぼくはこの人のことをよくもあんなにわるく思えたものだ！』

ぼくは自分自身にもむしゃくしゃしたし、カルル・イワーヌイチにも腹だたしい気持になり、笑いたくもあれば泣きたい気持でもあった。神経の調子がぐるぐるまわっていたのである。

《Ach, lassen sie (あ、もうほ) カルル・イワーヌイチ!》ぼくは枕の下から首を出しながら、目に涙をためて、そう叫びたてた。

カルル・イワーヌイチは不思議がつて、ぼくの足の裏にさわるのをやめ、なにを泣いているのか、なにかわるい夢でも見たんじゃないかと心配顔でぼくに聞きだしたしはじめた。そのドイッ人らしい、人のよさそうな顔と、ぼくが泣い



た理由を同情をもって探つてやろうとするその心づかいに、涙はいやがうえにもとめどなく流れたのだ。ぼくは気がとがめた。そして、さつきはどうしてあんなにカルル・イワーヌイチがきらいだったりその部屋着や帽子や房が虫酸が走るほどいやな気がしたりしたのか、合点がいかなかった。それが今度は逆に、そういっただけのもがどれもこれもひどく好ましいものに見え、帽子の房までが彼の人のよさを示すれっきとした証拠のような気がしてきたのである。ぼくは彼に、わるい夢を見たせいで泣いているんだ——夢のなかでは、ママが死んで、運ばれていって、葬られるところだった——と教えた。ところが、そんなことはみんなただの思いつきにすぎなかったのだ。ゆうべどんな夢を見たのか、まるつきり覚えがなかったくらいなのである。それなのに、ぼくの話に感動したカルル・イワーヌイチがぼくをなぐさめたり安心させたりしはじめると、なんだかほんとうにさういふこわい夢を見たような気がして、涙が今度は別の理由で流れたのだ。

カルル・イワーヌイチがそばを離れると、ぼくは寝床の上からだをおこして、ちいさい足に靴下をはきだした。涙はややおさまったが、自分がこしらえた夢からきた陰鬱な気持はぼくから去らなかつた。そこへ爺やのニコライがはいってきた。小男で、身なりが小さっぱりして、いつもまじめで、きちょうめん、礼儀ただしく、カルル・イワーヌイチとは大の親友

なのである。ぼくたちの着物とはきものをもってきてくれたのだ。ヴォロージャにもってきてやったのは長靴だが、ぼくにもってきてくれたのは、ここ当分まだ、例のしゃくにさわる蝶むすびのリボンのついた短靴なのである。あの場にこの爺やが居合わしたら、あまりがわるくて泣けなかつたにちがいない。おまけに、朝日が窓のなかを陽気そうに照らしているし、ヴォロージャが洗面台にかがむようにして立ちながら、マリヤ・イワーノヴナ（姉の家庭教師）のまねなどをして愉快そうにきゅきゅきゅ笑い声をたてるものだから、きまじめなニコライでさえ、肩にタオルをかけ、片方の手で石鹸をもち、もう一方の手で金だらいをもちながら、にやにやして、

「もうけつこうですよ、ヴラジミール(ヴォローシキの正名)・ペトローヴィチ、お顔をあらいなさいよ」などと云っているのだ。

で、ぼくもすつかりはしゃいでしまった。と、そこへ、勉強部屋からカルル・イワーヌイチの「*Sind sie bald fertig?* (用意はもうじきですか?)」という声が開こえてきた。

その声は毅然としていて、もはや、さつき涙をさそつたほどぼくを感動させた人のよきそうな色合いはおびていなくなつた。勉強部屋では、カルル・イワーヌイチはまるつきり別人なのだ。彼はそこではひとりの教師なのである。ぼくは手ばやく服を着、顔をあらうと、片手にブラシをもつたまま、ぬれ毛をなでつけながら、その

呼び声にこたえて姿をあらわした。

カルル・イワーヌイチは眼鏡を鼻さきにのせ、本を片手にもつて、自分のいつもの場所、ドアと小窓のあいだに、腰をおろしている。ドアの左側にはちいさい本棚が二つあって、ひとつはぼくたち子供用、もうひとつはカルル・イワーヌイチ専用ということになっている。ぼくたちの本棚にはあらゆる種類の本が（教科書から教科書以外の本まで）のついで、立ててあるのもあれば、横になっているものもある。赤表紙の《*Histoire des voyages*》(旅行史)という大部の二巻だけが行儀よく壁によりかかっている、あとはながいのやら、分厚いのやら大小さまざまな本（厚紙表紙だけで中身のないやら、中身だけで表紙のないやら）がならんでいた。休憩時間まえに書庫（カルル・イワーヌイチはそのちいさい本棚を大げさにそう呼んでいた）の整頓を言いつかると、なにもかもおなじそこへ押しこんでしまふせいである。彼専用の本棚の本の蒐集は、量こそぼくたちのものより多くはなかつたけれど、種類はずつと多岐にわたっていた。いまでもそのうちの三冊がぼくの記憶にのこっている。それは、キャベツ畑の施肥に関する、ドイツ語の、表紙なしの小冊子と、かどの焼けこげている、表紙が羊皮紙の、七年戦役史一巻と、それに流体静力学総論とである。カルル・イワーヌイチは余暇の大部分を読書にといやしたため、目をわるくしてしまつたほどなのに、それでいてこうした本と「北方の蜜蜂」

(当時のロシヤの有名な雑誌) 以外になにひとつ読んでいなかった。

カルル・イワースイチの本棚の上ののつていたもののなかに、ぼくになににもまして彼のことを思いださせるものがひとつあった。それは、木製の台にはめこんだボール紙製の筒で、その筒は台にはまったまま留め金でうごくようになつていた。筒にはだれか奥さんらしい女と床屋を描いたざれ絵がはりつけてある。カルル・イワースイチはこういう紙ばりが得意で、この筒も彼自身の発案になるもので、自分のよわい目をつよい光線からまもるためにこしらえたのである。

いま見るように、ぼくの目のまえには、綿入れの部屋着を着て、あかい帽子の下からまばらな白髪をのぞかせている、ひよろながい彼の姿がうかんできくる。彼はちいさいテーブルのそばに腰かけている。その小卓には例の床屋が描いてある筒がたてであつて、彼の顔に影をおとしている。本人は片手で本をもつて、もう一方の手は安楽椅子の腕木の上にやすませている。そばには、丸字盤に猟兵が描いてある時計や、チェックのハンケチや、くろくてまるい嗅ぎたばこ入れや、みどり色の眼鏡のサックや、ベンチののつているペン皿などがおいてある。こういったものがみな実にかちんとときちようめんにその場所においてあるので、その整頓ぶりを見ただけで、カルル・イワースイチという人は心がきよらかで気持のおだやかな人にちがいない。

と結論できるくらいである。

よく、飽きるほど下の広間を駆けずりまわつて、二階の勉強部屋へ爪さきだちでしのびこんでみると、カルル・イワースイチはひとり気楽に自分の安楽椅子に腰をかけて、おだやかで、いかめしそうな顔つきをして自分の愛読書のうちのかなにかを読んでいる。ときには、読書をしていない彼を見かけることもあつた。そんなとき、眼鏡はおおきな驚つ鼻の上にずりおち、ほそめにあけた空いろの目は一種特別な表情でものを見、唇は物悲しそうな微笑をうかべている。部屋のなかがはひっそりとして、彼の規則ただし、い思つかいと、猟兵のかいてある時計のちかちかという音がきこえるばかりである。

よくこんなことがあつた。彼に気づかれないままに、ぼくはドアのちかくにたたずんで、こんなことを考える。『ほんとうにかわいそうなお爺さんだ！ ぼくらは大勢だし、みんなして遊んでいるから楽しいけど、この人はひとりぼっちで、だれにもかわいがってなんかもらえない。この人は自分のことをみなし子だつていつているけど、そのとおりで。この人の身の上ときたら、まったくおそろしくらいだ！ ぼくは、この人がニコライに身の上話をしていたのをおぼえているが、——この人のような境遇だったら、さぞおそろしいことだらうな！』すると、かわいそうでたまらなくなつて、そばへいき、相手の手をとつて、『Liebe(大好)カルル・イワースイチ！』などと言つてみるのである。

彼はぼくにそう言われるのが好きで、そんなときはきまつて愛撫してくれ、感動したような様子を見せるのだつた。

第二の壁には地図が何枚かかかつていて、そのほとんどがぼろぼろにやぶけているけれども、カルル・イワースイチの手で器用に裏うちがしてある。第三の壁には、そのまん中に階下へおりの扉口があつて、片方に定規が二本かけてある。一本の傷だらけのほうはぼくたちのので、もう一本のほうは彼専用で、あたらしくて、野をひくためというよりむしろ叱咤激励のためにかわれることがおこつた。もう一方には黒板があつて、そこには、ぼくたちの大きなくじりには丸が、ちいさなくじりには十字がつけられることになつていた。黒板の左がわの隅はぼくたちがひざまずかされる場所だつた。

この片すみはぼくの記憶にふかきさみこまれている場所である！ 暖炉のたき口の戸もおぼえていれば、その戸の空気穴も、その穴をまわすときに出る音もおぼえている。よく、そのすみに立ちとおして、そのために膝や背中が痛くなると、こう考えたものだつた。『カルル・イワースイチはぼくのことなんか忘れちまつているんだ。むこうはふわふわした安楽椅子にかけて流体力学なんか読んでいるんだもの、そりゃ気楽だらうさ、——ところが、こつちはどうだい？』——そして、自分のことを思いださせようと思つて、たき口の戸をそうつとあけてしたり、壁の漆喰をほじくつたりしはじめる。

が、そこへ突然、いやにおおきなかけらが床の上に音をたてておちでもすると、——それこそ、その恐怖だけでもどんな罰をうけるよりいやな気がする。ところが、カルル・イワーヌイチのほうをふりかえってみると、——彼は手に本をもって腰かけたまま、まるでなんにも気がつかないといったふうなのである。

部屋中央にはテーブルが置いてある。このテーブルにはくろい油布がかけてあるが、それはほうぼう引きちぎれて、あちこちにペン・ナイフで傷だらけにされた縁が見えている。テーブルのまわりには、数脚の、なんにも塗ってないけれども、ながいことつかつたためにかたかに光っている腰かけが置いてある。いちばん最後の壁には三つの窓がいつぱいにあけてある。窓から見える景色はというと、こんなくあいである。窓の真下には道路があるが、穴のひとつひとつが、砂利のひとつひとつが、轍の一本一本がぼくにはずいぶん前からなじみ深く、なつかしいものになっていた。道路のむこうにはきれいに刈りこんだ菩提樹の並み木があつて、そのかげのところどころに編み垣が見える。それから、並み木道をへだてて草原がのぞまれ、その一方には打穀場があり、反対側には森がある。窓の右手にはテラスの一部が見え、そこにはたいてい大人が陣取つて、昼飯まえのいこいをとつていた。カルル・イワーヌイチが書き取りの答案をなおしているあいだに、よく、そつちをのぞいてみたものだが、おかあさんのくろい頭

やだれかの背中が見えたり、そこから話し声や笑い声がきこえてきたりする。すると、そこへ行けないことが残念で、『いったい、いつになつたら大人になって、勉強もやめ、こんな対話の本など読まないで、好きな連中といつしよにいられるようになるのかしら？』などと考える。するうちに、その口惜しさが悲しみにかわつてしまひ、なぜかは知らないが、なにやらやつらに考えこんでしまつて、カルル・イワーヌイチが書き取りのまぢがいて腹をたてているのも耳にはいらなくなつてしまふ。

カルル・イワーヌイチは部屋着をぬぐと、肩にパットのはいつている、ひだのついたあおい燕尾服を着こみ、鏡のままでネクタイをなおして、ぼくたちを階下へ、おかあさんに挨拶をさせにつれていく。

## 第二章 ママ

おかあさんは客間において、みんなにお茶をついでやつている。片手に急須をもち、もう一方の手でサモワールのコックをおさえると、湯が急須の上にあふれて、盆の上にごぼれる。だが、おかあさんはそれにじつと目をあてているのに、気がつかない。ぼくたちがはいつていつたのも気がつかないらしいのである。

愛する人の面影を想像の中によみがえらせようとすれば、過ぎし日の思い出がそくそくとむらがりうかんできて、その思い出の台い間から、

涙のとばりをおして見るように、その面影はほんやりと目にくかぶただけである。それは想像のためにじみ出る涙である。おかあさんのあのころの姿を思い浮かべようとすると、心にかんでくるのは、いつもかわらぬ人のよさと愛情をたたえたたとび色の瞳と、首筋の、ささやかなおくれ毛が巻いている個所のやや下あたりにあつたほくろと、縫いとりをした、しろい襟と、しよつちゆうほくを愛撫してくれ、しよつちゆうほくが接吻をしていた、きゃしゃでかさかさした手くらしいのもので、全体の表情はなかなかとらえにくい。

長椅子の左手にはふるいイギリス製のピアノがあつて、そのピアノを前にして顔色のあざぐろい姉のリューボチカが、たつた今冷水であらつたばかりのぼら色の手で、目だつて緊張した面持ちで、クレメンティのエチュードをひいている。彼女は十一歳である。みじかめな麻の服を着、レースで縁取りをした、しろい、ちいさなズボンをはいている。彼女は、オクターヴはアルペジオでなければとれない。そのそばには、ぼら色のリボンのついた室内帽をかぶり、空いろのチョッキを着たマリヤ・イワーノヴナがややすかずに腰かけている。その腹だたしげなあか顔は、カルル・イワーヌイチがはいつてきたとたんに、なおいつそうきつそうな表情をおびた。彼女はおどしつけるように彼をならみつただけで、相手のおじぎには答へもせず、足で拍子をとるながら、『Un, deux,

trois, un, deux, trois (一、二、三)とかがぞえつづけ——一段と声がたかくなり、命令するような調子をおびてきた。

カルル・イワーヌイチはそんなことにはまるつきり頓着せずに、いつものとおり、ドイツ式の挨拶にのつとつて、まっすぐおかあさんの手に接吻をしにいった。おかあさんははっとわれにかえつて、かぶりをふったが、それはちょうどその動作でかなしい想念を追いはらおうとでもするように見えた。そして、カルル・イワーヌイチに手をさしだして、相手が自分の手を接吻しているあいだに、こちらも相手のしわだらけのこめかみのあたりに接吻をしてやった。

「*Ich danke*, (ありがとう) カルル・イワーヌイチ。」  
ママはこう言うと、やはりドイツ語をつかっ  
てこう聞いた。「子供たちはよく休みまして？」

カルル・イワーヌイチは片ほうの耳がつんばだし、それにピアノの音がそうぞうしかつたので、今はまるつきりきこえないのだった。彼は長椅子のもっとちかくに身をかがめて、片手でテーブルよりかかるようにして片足で立ちながら、当時ほくには優雅の極致に見えた例の微笑をたたえ、帽子を頭の上にちよつとあげて、こう言った。

「失礼させていただきます、ナターリヤ・ニコラーエヴナ」

カルル・イワーヌイチはつるつる頭から風邪をひかないようにと、けつしてあかい帽子をぬがないようにしていたが、客間へはいるときは

その都度、許可をもとめることにしていたのである。

「そのままかぶつていらっしやい、カルル・イワーヌイチ……わたし、まうお開きしているんですよ、子供たちはよくやすんだかしらつて。」  
ママは彼のほうへからだをよせて、かなり大きな声でそう言った。

それでも彼には今度もまるつきりきこえなかつたらしく、はげをあかい帽子でかくして、いっそうにこやかに笑っただけだった。

「ちよつとやめてちょうだい、ミミイ」と、ママはマリヤ・イワーノヴナににこにこしながら言った。「ちよつとも聞こえないわ」

おかあさんの顔はふだんでもすばらしかったが、笑ったときには比較にならないほどすばらしくなつて、周囲のものがなになににまでうきうきしてくるみたいなのである。生涯のつらい時期であっても、あの微笑をたとえちらつとも見ることができたら、ほくは悲しみとはどんなものかも知らずにすこせたらう。ほくには、顔のうつくしさとよばれるものはもつぱら微笑にふくまれているような気がする。微笑が顔に魅力をそえるならば、その顔はすばらしい顔であり、微笑が顔になんの変化もあたえなければ、その顔はありきたりな顔であり、微笑が顔をそこなうようであれば、その顔はみにくい顔なのだ。

ママはほくとおはようを言いかわすと、両手でほくの頭をおさえてうしろへそらせてから、

まじまじとほくの顔を見つめて、こう言った。

「おまえはきょう泣いたのね？」

ほくは返事をしなかつた。ママはほくの目に接吻してから、ドイツ語で、

「なんのことで泣いたの？」と聞いた。

ママは、ほくらとちよつとけた話をするときは、いつでも、完璧にマスターしていたドイツ語をつかうのだった。

「ほくはね、夢を見て泣いたんだよ、ママ」と、ほくは自分がつくりだした夢を細部にいたるまで思いうかべて、その思いに思わず身をふるわせながら言った。

カルル・イワーヌイチはほくの言ったことを保証してくれたが、夢の内容については口をつぐんで語らなかつた。ママはさらに天候の話などをし(この話にはミミイも口をいれた)、幾人かいる古参の召使の分として角砂糖を六つほど盆にのせてやると、窓ぎわにおいてある刺繡台のほうへ立つていった。

「さあ、子供たち、今度はパパのところへいらつしやい、そしてパパに、打穀場へいくまえにかならずわたしのところへ寄つてくれるように言つてちょうだい」

またもや音楽がはじまり、拍子をとったり威圧的な目つきをしたりすることがはじまり、ほくたちはパパの部屋へむかつた。そして、いまだにおじいさんの代から給仕室という名前を持つつづけている部屋をとつて、晝斎へはいつていった。

## 第三章 パパ

パパは文机のそばに立つたままで、なんの封筒か、封筒や、書類や、積みあげた金などを指さしながら、興奮して、なにか執事のヤーコフ・ミハイロフにむかつて熱弁をふるっていた。相手はドアと晴雨計のあいだの、いつもの自分の居場所に突つ立ったまま、うしろ手にくんだ手の指を猛烈な速さであちこち動かしていた。

パパが興奮すればするほど、その指のうごきもはやくなり、逆に、パパが口をつぐむと、指のうごきもとまる。かと思えば、ヤーコフ自身が口をききはじめると、指はそれこそまったく落ちつきをうしなつて、めちやくちやにいろんな方向へおどりだすのである。その指のうごきから、ぼくにはヤーコフの胸のうちが見ぬけそなうな気がした。それでいて、その顔はいつでも平静で、——自分の品位の意識と同時に隷属の意識を、つまり、わたしの言うことはまぢがっちゃいないんですが、どうぞご随意に！ とでもいうような気持をあらわしているのである。

パパはぼくたちの姿を見て、  
「待ってなさい、今すぐおわるから」と言っただけだった。

そして、首の動作で、ぼくたちのだれかにドアをしめるように命じた。

「いやはや、おまえはきょうはどうしたんだね、ヤーコフ？」と、パパは、一方の肩をしゃくり

あげながら（パパにはそういう癖があった）、執事にむかつて話をつづけた。「この八百ルーブルはいつている封筒は……」

ヤーコフは算盤をひきよせて八百といれると、ほんやりとある一点に目をそいで、次を待った。

「……わしの留守中の農場の支出にあててあるんだ。わかっているかい？ 水車小屋の代金としておまえの手もとに千ルーブルはいつてくるはずだ……そうだろう、ちがうか？ それに国庫からは保証金が八千かえってくるはずだ。それから、干し草の代金か、おまえの計算だと七千ブードは売つてもいいということだから、——三千はいつてくる勘定だ。してみると、入金総計いくらになる？ 一万二千だろう……そうだろう、ちがうか？」

「まったくそのとおりでございます」とヤーコフは言った。

だが、指のうごきはやくなつたことから見て、彼は反対したい気持だということがわかった。が、パパは相手をさえざるようにしてこう言った。

「そこで、その金のうちから一万ほどペトローフスコンエの地代として協議会へ送つておいてもらいたいんだ。それから今度は事務所にある金をわしのところへ持つてきて」とパパは語をついで（ヤーコフはまえの一万二千をご破算にして、二万一千といれた）、「きょうの日づけで支

出の欄にいれておくんだ。（ヤーコフは算盤玉をくすして、算盤をさかさにした。きつと、そうすることによつて、二万一千の金もこんなふうにならぬ）に消えてしまふんだということを示そうと思つたのだろう。それから、この金のはいつている封筒は宛て名どおりわたしておいてくれ」

ぼくは机からちかいたところに立つていたので、上書きをちらつと見ることができた。「カル・イワーノヴィチ・マウエル殿」となつていて、きつと、ぼくなどが知つてはならないものを

読んだことに気づいたのだろう、パパはぼくの肩に片手をのせて、かるい動作で机からわきへ離れさせようとした。ぼくはそれが愛撫なのか叱責なのかわからなかつたけれど、ともかくぼくの肩のついていたおおきな筋はつた手に接吻した。

「承知いたしました」とヤーコフは言った。「ところで、ハバローフカの金はどういたしまししょう？」

ハバローフカはママの持ち村だった。

「事務所においとけ、わしの命令なしには絶対に何につかつてもならんぞ」

ヤーコフは何秒かのあいだ口をつぐんでいた。やがて急に彼の指が猛烈な勢いでまわりだしたかと思つと、彼は、それまで主人の命令を聞いているあいだ見せていた従順で頭のめぐりのわるそうな表情を、持ちまえのずるがしこそうな表情にかえ、算盤をそばへひきよせて、こ

「ひとつ申しあげさせていただきます、ピョートル・アレクサンドルイチ。これは旦那さまのご随意でございますが、協議会へは期限までに支払うわけにはまいりません。旦那さまの仰せによります」と、彼は一言一句切りながら言葉をついで、「保証金と、水車小屋や干し草から入金があるはずだとのことでございますが……（それらの項目をあげながら、彼はそれを算盤にいれた）それだと見込みがいになりはすまいかと、それが心配なのでございます」と、彼は、ちよつと口をつぐんで、考えぶかそりな目つきでパパを見やつて、そうつけ加えた。「どうして？」

「そのうちだんだんにおわかりになります。まず水車小屋の件でございますが、水車小屋の親父がもう二度もわたくしのところへ期限を延長してくれと言つてきております。真正正路、手もとに金がないと申しておるんでございます……今もここへまいつておりますから、ひとつ旦那さまご自身でご相談になつてはいかがなものでしょう？」

「あの男はいつたいなんて言つてるんだね？」  
 パパは水車小屋の親父などと話なんかしたくないという気持を頭のふり方で示しながら、そう聞いた。

「なんて言っているかは知れきつたことでございます。製粉の仕事が全然なかつたとか、少々あつた目くされ金はのこらず土手の修復につきこんでしまつたとか、そんなことでございます。

が、かと言つて、あれを追いだしてみたところで、旦那さま、別に得になるようなこともございませぬまい？ それから保証金のこともおつしやつておいででしたが、わたくしはすでにこゝう申しあげておいたはずでございます。当家のお金はあそこに据えおかれておりますんで、あれはそうすぐ受けたすわけにはまいりませぬ。それから、わたくし、ついこのあいだ、町のイワン・アファナーシイチのところへ麦粉一車とそれに関する書きものを送りましたんですが、またまたこゝう返事なんでございます。旦那さまのお役にたてたらこんなうれしいことはない、この問題ばかりは自分の思うとおりにはいかない、それに、いろんな点から見ても、二ヵ月後でも旦那さまの受領証をいただくところまではともござつけれまいとのこと。それに、旦那さまは干し草のこともおつしやつていらつしやいましたが、これはまあ、三千でさばけるといふことにおきましよう……」

彼は算盤に三千とおいて、一分ほどのあいだ黙つて算盤とパパの目を見くらべていたが、その表情はこゝう言いたげだつた。『これで旦那さまご自身もおわかりでしょうが、ずいぶん少のうございませう！ それに、干し草をいまお売りになったら、また損をしますよ、おわかりでしょうけれど……』

彼にはまだまだいくらでも論証のたくわえがあるように見えた。おそらく、そのためだろう、パパは相手をさえぎつて、

「わしは、自分の命令は変更しないぞ」と言つた。「が、もしその入金がほんとうに手問どるようだったら、しょうがないから、ハバローフカのほうのあがりから入り用だけ取るがいい」

「承知いたしました」

ヤーコフの顔と指の表情から見て、最後の命令が彼を大いに満足させたことは明らかだつた。ヤーコフは農奴あがりの、仕事に実に熱心で忠実な人間だつた。りつぱな執事というものはみんなそうだが、彼は事主のためとなることと極端なほどけちで、主家の利益ということでもさこぶる風変わりな考えをもつていた。彼はいつまでも奥さまの財産で旦那さまの財産をふやすことばかり考え、奥さまの持ち村からのあがり全部ペトロフスコエ（ほくちちが住んでいた村）のためにつかうことが絶対に必要だといふことを立証しようとするのである。たつた今も彼はそれに完全に成功したといふので、得意満面なのである。

朝の挨拶がすむと、パパは、おまえたちも田舎でのらくら遊びくらすのはもうたくさんだ、もういいかげん子供じみた気持からぬけて、まじめに勉強しなければならぬ時期が来ているんだなどと言つた。

「おまえたちももう知つていふことだろうが、わしは今夜モスクワへ発つんで、おまえたちもいっしょにつれていこうと思つていふんだ」とパパは言つた。「おまえたちはお祖母さんの家

にやつかになることになるんだ、そしてママは娘たちとここに残ることになる。そこで、おまえたちにはこういうことをおぼえておいてもらいたいんだ、それは、ママにとつてこれからの唯一のなぐさめは、おまえたちがよく勉強しているの、みんながよろこんでいるという知らせを聞くことだということだ」

ここ二、三日まえから目だつていたいろんな準備から、ぼくたちはすでになにかただならぬことがおきるにちがいないとは予期していたものの、このニュースはおそろしいショックだった。ヴォロージャは顔が真っ赤になつてしまつて、おかあさんの伝言もふるえ声でつたえたくらいだった。

『してみると、あの夢の前知らせはこれだったんだな！』とぼくは思った。『もつとわるいことが起きなければいいが』

ぼくはおかあさんがかわいそうでならなかつた。が、同時に、ぼくもほんとうに大きくなつたのだなと思うと、うれしくもあつた。

『きょう発つという事になれば、きつと授業はないぞ。こいつはずばらしいや！』とぼくは思った。『それにしても、カルル・イワースイチがかわいそうだな。あの人はきつとお払い箱になるにちがいない。だつて、そうでなかつたら、あの人にあんな封筒なんか用意するわけはないもの……；できることだつたら、いつまでもここで勉強していて、発たないでいたいくらいだ。そして、おかあさんと別れたり、かわいそ

うなカルル・イワースイチの気持を害したりしないですめばそれにこしたことはない。あの人はこのままで、とても不幸なんだもの！』

そういう考えがぼくの頭をかすめた。ぼくはその場をうごかずに、自分の靴のくろいリボンを見つと見つめていた。

パパはカルル・イワースイチを相手になお二言三言、晴雨計がさがつた話などをして、ヤーコフに、お名残りに食後猟に出てわかい猟犬の吠え声をきくつもりだから犬どもに餌をやらすにおけと言いつけると、ぼくの予想を裏ぎつて、ぼくたちを勉強部屋へ追いやつた。もつとも、猟につれていつてやるというて、慰めてはくれたが。

二階へあがる途中、ぼくはテラスへたち寄つてみた。扉口に、父の愛犬のミールカが日なたぼつこをして、目をほそめながら寝そべつていた。

「ミールカ」とぼくは言つて、犬をなでてやり、鼻面に接吻をしてやつた。「ぼくたちはきょう発つんだよ。さようなら！ もうこれつきり会えないんだね」

ぼくは急に感傷的になつて、泣きだしてしまつた。

#### 第四章 授業

カルル・イワースイチはひどく不きげんだつた。それは、眉根をよせているところや、フロ

ック・コートたんすを筆管たんすのなかへほうりこむ様子や、ぶりぶりしながら部屋着の帯をしめる様子や、ぼくたちが暗記すべき個所に印をつけるのに対話の本につよくぎゆうつと爪で線をひいたことなどから見て、あきらかだつた。ヴォロージャはちゃんと勉強していたが、ぼくのほうはめちやめちやに気持がみだれてしまつて、それこそなにひとつ手につかなかつた。ながいことほんやりと対話の本に目をさらしてはいたが、間近かにせまる別離のことを思うと、目に涙があふれ出て、本が読めないのである。それに、その対話をカルル・イワースイチに口で言つてみせることになつて、カルル・イワースイチが目をなせば閉じて（これはよくないきざしだつた）、

ぼくの言葉を聞いているうちに、一人が「Wo kommen sie her? (どこからいら?)」と言い、もう一人が「Ich komme vom Kaffe-Hause. (わたしはコーヒエ)」と答える個所にさしかかつたとき、ぼくはそれ以上涙がこらえられなくなり、慟哭にさまたげられて、「Haben sie die Zeitung nicht gelesen? (あなたは新聞を読みましたか?)」という文句が発音できなかつた。それにまた、いよいよ書きとりということになつたときも、紙の上に涙をおとしてしまつて、まるで包み紙に水で書いたみたいなしみをいっばいこしらえてしまつた。

カルル・イワースイチはかんしやく玉を破裂させて、ぼくをひざまずかせ、こういうことを強情というんだよ、人形喜劇（これは彼の愛用

語だった)というんだ、とくり返し言いながら、定規でおどしつけて、謝罪を要求した。ところが、こちらは涙が出て涙が出て、ひと言も口がきけないのだ。が、そのうち、ついに、きつと、彼は自分のほうがわるいんだというような気がしてきたのだらう、ニコライの部屋へ立っていつて、ドアをばたんとしめてしまった。

勉強部屋からでも、爺やの部屋の話は聞きとれた。

「聞いたかね、ニコライ、坊っちゃんたちがモスクワへ行くつて話を？」と、カルル・イワーヌイチは部屋のなかへはいっていきながら言った。

「そりゃ無論、聞きましたとも」

ニコライは席を立とうとしたのにちがいない、カルル・イワーヌイチは、「ま、坐つてなさい、ニコライ！」と言い、つづいてドアをびたりとしめきってしまった。ぼくは例のすみから出て、扉口へいつて立ち聞きした。

「どんなに人にいいことをしてやろうと、どんなに愛情をもとうと、感謝など期待しちやいけないものらしいね、ニコライ？」などと、カルル・イワーヌイチはしみりした調子で言っていた。

ニコライは窓ぎわに腰かけて靴仕事にかかりながら、そのとおりでというふうにならずにみせた。

「わしは十二年もこの家に暮らしてきているんで、神さまのまえでもこう言いきれるんだがね、

ニコライ」とカルル・イワーヌイチは天井をおぎ見ると同時に嗅ぎたばこを上にあげながらこう言いつづけた。「わしはあの子たちを実の子以上に愛しもし、めんどうも見てきたつもりだ。おまえもおぼえているだらう、ニコライ、ヴォロージヤが熱病にかかったときなど、夜の間も寝ずにあの子の枕もとに坐りつきりだったそうなんだ！ あの子はわしは気のいい親切なカルル・イワーヌイチということになっていて、あのころはこのわしもなくてならない人間だったのだ。ところが、今は、彼は皮肉をこめた薄笑いをうかべながら、こうつけ加えた。

「今は子供たちも大きくなったんだから、まじめに勉強しなきゃならんだとき。これじゃまるで、ここでは勉強していなかっただけな言いぐさじゃないか、ニコライ？」

「なにもこれ以上勉強することもなさそうだがね」と、ニコライは針をおいて、両手で蠅びき糸をひっぱりながら、言った。

「そうなんだ、今じゃもうわしはいらなくなつたんで、お払い箱にしなければならなつておけななさ。これじゃ、契約もへつたくれもありやしない！ 感謝もなにもあつたもんじやない？ わしはナターリヤ・ニコラーエヴナなら敬愛しているよ、ニコライ」と、彼は手を胸の上におきながら言った。「ところが、あの人にどうしようもないんだ……この家におけるあの人と変わりないんだから」と言いながら、

彼は思い入れたつぷりで革の断ちくずを床へほりつけて、「これがだれの企みか、どうしてわしがいらなくなつたかについては、わしにもわかつているよ。わしはほかの連中みたいにごきげんをとつたり、どんなことでもご無理ごもつともですますようなことをしないからだ。ふだん、だれの前でも、ほんとうのことを言いつけているからだ」と、彼は傲然と言いはなつた。「あんな連中はかつてにするがいい！ 連中のほうは、わしがいなくなつたからつて、ふところぐあいがよくなるわけでもなし、こつちはまあ、おかげで、けつこうパン切れくらいにはありつかるだらうからな……そうじゃないかね、ニコライ？」

ニコライは頭をあげて、カルル・イワーヌイチを、まるでほんとうにパン切れにありつけるかどうか確かめたいとでもいうふうな凝視したが、なんにも言わなかった。

カルル・イワーヌイチはこんな調子で、くどくどと、ながいことしゃべっていた。自分が以前住みこんでいたある將軍の家では自分の功勞をここの者よりもたかく買つてくれていたというような話(ぼくはそんなことを耳にするのはとてもつらかつた)や、サクソニヤの話や、自分の両親や自分の親友の洋服屋のションハイトの話などをしていった。

ぼくは彼の嘆きに同情をおぼえた。そして、自分がほとんどおなじく愛していた父とカルル・イワーヌイチがお互いに理解しあつてい



ないのだと思うと情けなかつた。ぼくは部屋のすみへもどつてしやがみこんで、どうしたら二人のあいだのむつまじい關係がとりもどせるだろうと、あれこれ思案をかきかねてゐた。

カルル・イワーヌイチは勉強部屋へかえつてくると、ぼくに、立つてきて書き取りの帳面を用意するように命じた。すっかり用意ができあがつたところで、彼はものものしげに自分の安楽椅子にからだをおとして、どこかふかいところからでも出てくるような声で次のような文句を書き取らせにかかつた。《Von alien Leiden-schaften die grausamste ist... haben sie geschrieben?》(あらゆる性癖中の「最も悪」)「ここで彼は言葉を書き取つて、おもむろにかぎたばこをかいでから、一段と力をこめて、こう語をついだ。《Di grausamste ist die Un-dank-bar-keit... Ein grosses U.》(「なりこは...は英文字です」)「ぼくは最後の語を書きあげると、そのつづきを待ちながら、彼の顔に目をあてた。《Punktum.》(「ドット」)彼はやつとわかるくらいの微笑をうかべてこう言つたあと、ぼくたちに、自分のところへノートをもつてくるように合図をした。

彼は幾度かいろいろな抑揚をつけながら、満足しきつたような顔つきで、この自分のいつわらぬ気持をそのまま表現している格言を読みあげると、ぼくたちに歴史の宿題をだして、窓のそばに腰をおろした。その顔はさつきほど不きげんではなく、自分がうけた侮辱に対してそれに

見あうような仕返しをした人間の満足の表情をあらわしていた。

もう一時十五分前だというのに、カルル・イワーヌイチはぼくらを放免してやろうという気はないらしく、ひっきりなしにあたらしい問題を出していた。退屈と食欲がおなじくいらぬに過ぎなかった。ぼくはひどく待ちきれないような気持で、食事どきがせまつてきた兆候にいちいち氣をつけていた。と、まず女中がたわしをもつて皿をあらひにいこうとする。と、そこへ食器棚のなかの食器類ががちやがちやいしたり、くりだし食卓をひろげたり、椅子をおいたりする音がきこえてくる。すると今度は、ミミイとリューボチカとカーチエンカ(カーチエンカはミミイの娘で、年は十二)が庭からかえつてくる。それなのに、フォーカの姿が見えない。フォーカはいつも、お食事の用意ができましたと言いくるることになつていたので。来れば、さつそく本をほうりだして、カルル・イワーヌイチには目もくれずに、階下へ駆けおりにけるのだ。と、そこへ、階段をつたつてくる足音がきこえた。だが、それはフォーカではない! フォーカの足音なら、研究していたから、いつでも彼の長靴のきゅつきゅつという音が聞きわけられたのである。ドアがあいて、なかへはいつてきたのは、まるつきり見おぼえない人間だった。

## 第五章 白痴の予言者

部屋のなかへはいつてきたのは、年のころは五十くらいで、あおくてほそながい、あばたつらに、ながい白髪とまばらな赤茶けた小さな顎ひげをはやした男だった。おそろしくのつぼで、扉口をおるには、首をさげるところか、からだ全体をかかめなければならなかつた。身には、長衣のようでもあれば法衣のようでもある、なにやらぼろぼろの着物をまとい、手には大きな杖をたずさえていた。部屋へはいりしなに、彼はその杖で力いっばいどしんと床をならし、眉をゆがめ、度はずれに大きな口をあけて、ぞおつとするような不自然な笑い声をたてた。それに、めつちで、その見えないほうの白眼がしよつちゆうおどつているため、それがただでさえみにくくその顔になおいつそういやらしい表情をあたえていた。

「ほほう! つかまつたのう!」彼は小さきみな足どりでヴォロージャのそばへ駆けよりながらこうわめくと、ヴォロージャの頭をおさえて、そのてつべんを仔細にしらべはじめたが、——やがてくそまじめな顔つきをしてヴォロージャから離れると、卓のそばへ歩みよつて、油布のテーブルかけの下を吹いては十字をきりはじめた。そして、それから、「おお、かわいい子にな! ああ、情けない!.....かわいい子どもたちは飛んでいってしまう」と、情をこめてヴォロージャの顔をじつと見つめながら、涙にふるえる声でそう言ひだし、実際に、はらはらとおちる涙を袖でぬぐいはじめた。